

2019新天地に翔る——。

移籍選手

SPECIAL INTERVIEW VOL. ②

■インタビュー—田中大貴(スポーツアンカー)



「日本ハムは『選手ファースト』の球団。フリーのしやすさを感じています」

#19 Chihiro KANEKO Fighters

金子式大

[オリックス→日本ハム/投手]

甘え排除しアップグレード

移籍選手SPECIAL INTERVIEW VOL. ② 金子式大 Chihiro KANEKO #19

ういうわけではないんですけど。そういうバトンを受け取って、また次のピッチャーにバトンを渡すという、その真ん中にあることが僕の中ではすごく新鮮というか、そこで投げたいという気持ち、今の僕の中にはあります。

——2イニングないし1イニングをMAXで投げる。そんな感じになるんでしょうね。

金子 中継ぎ、抑えをやったことがないわけではないので、イメージはつくんですけど、でも、コントロール重視というよりは、気持ちで行くのかなと想像できますね。

——金子選手はよく「初回MAX」と言っていて、初回、立ち上がり目いっぱい力を入れて、抑えるのが大事と話をしていたことがありますが、そういう感覚なのではないですか。

金子 それは、先があるので、あえてそうしないといけないところがあるんですけど、中継ぎで登板したとしたら、自然と、そういう状態になるんだと思いますね。——なるほど。1年間、中継ぎで投げることに体的には耐えられそうなイメージはありますか。

金子 そうですね。18年はコンディショニングに不安がある中で無理をして、投げ

ていたのですが、今の状態は良いです。この状態が続けばあんまり問題なく行けるんじゃないかと思えます。こうすればいいというのがまた新たな引き出しが増えている感覚があります。

——11月、12月は具体的にどんなことを意識してトレーニングをしていたのですか。これまでとは異なり、ボールも投げていますね。

金子 投げ続けるところを考えたときに、いろいろな要素が必要です。柔軟性もそうだし、安定性、筋力の強さ、いろいろなことがあるんですけど、体のアライメントというか、コンディショニングが何だかんだ一番大事で、それが整っていれば、自然と筋力もついてくるし、良い投げ方もできる。コンディショニングがちょっと悪くなっても戻せる位置にいれると思えます。それが18年のシーズン中は悪い状態で無理やり投げていたので、余計体にも負担が掛かってしまった。それが改善されつつあるので、ちょっと悪くなってもすぐに戻せる感覚があります。

トータルワークアウトでの新たな取り組み、日本ハムでの役割、19年に向けての抱負など、続きは次号(1月21日号)に掲載します。

「先発からバトンを受け取って、また次のピッチャーにバトンを渡す。その真ん中にあることがすごく新鮮」



PROFILE

かねこ・ちひろ ●1983年11月8日生まれ。新潟県出身。180cm77kg。右投左打。長野県高からトヨタ自動車を経て05年自由獲得枠でオリックス入団。07年途中で先発に転向すると08年から先発ローテ入り。10年には17勝(8敗)で最多勝を獲得。11年、12年と度重なる故障に悩まされるも、13年は1年間を通して先発ローテを守り抜き、最多勝三振のタイトルを手に。翌14年には選手基準7項目をすべてクリアし、沢村賞を受賞した。18年オフに自由契約となり、日本ハムへ移籍。

PROFILE

たなか・だい ●1980年4月28日生まれ。兵庫県小野市出身。市立小4年時に野球を始め、小野南中では軟式野球部に所属。小野南では2年次から四棒に選り、3年夏は主将を任せられ西兵庫大会8強。慶大では4年春に3本塁打で本塁打王を獲得した。慶大卒業後、フジテレビジョンに入社し、アナウンサーとして報道・情報番組、スポーツを担当。4月1日、同社を退社し、5月からフリーに転身。モットーは「今を生きる」。